エスペラントとアナキストたち

Vivancos

★エスペラント語による最初のアナキズム情報誌『自由労働者』
（1925年から1931年まで発行）

過去すでに、さまざまな民族性とさまざまな文化をもつ人々の相互交流に際する世界語の有用性が痛感され始めていたのだから、不断の物質的進歩がいかなる隔たりをも解消しつつある現在、世界語が絶対不可欠な必要物となったことはまさに明白である。現在もはや民族による国境の枠内では現代生活を考えることが不可能となり、社会生活が国際的、世界的になったため、エスペラントはこの必要に、十分満足のいく解決をもたらすのである。

現在誰も外国での出来事を無視する権利をもたない。アナキストも同様であり、またそれを望みもしない。国家やブルジョアどもに仕える諸雑誌によってしょっちゅう誤って伝えられる情報には全然満足しない。もちろん公正にアナキストのグループや個人に情報を提供することを目的とした組織もあるけれども、翻訳や抄訳のために失なわれる時間は、しばしばその情報を古いものにしてしまう。

異った文化や教育や習慣をもった世界中の人々が深く研究し、アナキストの理想に関する諸観念に提供しつつある形態と進歩こそ、あらゆるアナキストがぜひ知らなければならない事柄である。我々アナキストこそ、我々の同時代人の著作や思想を比較検討する必要がある。エスペラントの一般的使用だけがそれを解決できる。この

目的にエスペラントを使うことによって、アナキストは、この無民族語にその充全な社会的価値を付与するのである。

エスペラント語の創造者であるザメンホフがアナキストではなかったことは、疑問の余地がない。彼の著作は、ヒューマニストの誠実な神秘主義とあらゆる人間に対する人種や民族による区別のない兄弟愛を源としている。ザメンホフは国境の打破を望んでいたが、アナキストは同じ目的で努力していないだろうか。ブーローニュ・スル・メール（フランス）での第一回エスペラント大会（一九〇五年）に際して、ザメンホフはそのひな壇で、「…今日はイギリス人とフランス人、ロシア人とポーランド人との集会が主題ではない。人間と人間との集会である…」と述べたが、これはまさしくアナキストの望んでいることではないか。自らの著作と思想によってザメンホフは、いわゆる「中立的な」エスペランティストたち、その多くは決して自ら民族的あるいはブルジョワ的偏見の重荷をおろす能力のなかった者たちよりも一層我々アナキストに近づいている。

エスペラントの普及以来、アナキストは、労働者エスペラント運動の前衛となってきた。一九〇五年、ストックホルムに最初のアナキストのエスペラント・グループが生れた。一九〇六年にはパリに、『平和ー自由』"Paco—Libereco"というグループが設立され、その重要な出版物によって全エスペラント運動にかなりの影響を与えた。

注目すべきは、アムステルダムでの国際的アナキスト大会に際して（一九〇七年）、エスペラントに好意的な決議が採択されたことである。ひき続く大会でも同様の決議がなされたが、それらの大会にエスペランティストの同志たちは積極的に参加し、おもにさまざまな国のグループ間の相互交流の世話をしていた。

極東の国々、とりわけ中国と日本では、アナキスト・グループがエスペラントに特別の関心をもち、二ヶ国語のさまざまな会報を刊行していたが、中でも特筆すべきは、『民声』"La Voco de La Popolo"と『新世紀』"Nova Jarcento"である。中国のもっとも抜きん出た活動家のひとりである師復は、達者なエスペランティストであって、そこのアナキズム運動に非常に大きな影響を与えた。彼は多くの作品をエスペラント訳し、またアナキスト・エスペランティストのグループを創立した。

巴金は、「エンマ・ゴールドマンの精神的な息子」と自称していたが、後には毛沢東主義の影響を受けた。彼は、そのアナキストとしての活動期に上海でエスペラン

トを学び、エスペラントで出版されていたユリオ・バギの小説『秋の中の春の日々』を中国語訳した。上海で出版された中国その他の国々の作家に関する人名辞典には、巴金について、小説家であり、エスペランティストの知識人とある。

一九二三年、ロシアのアナキスト、A・レヴァンドフスキーとJ・ジルベルファブは、ウクライナに〝ISAB〟（国際科学アナキズム図書館）を設立し、クロポトキンの『倫理学』やボロヴォヴの『アナキズム』を出版した。多くの出版物が予定されていたけれども（とりわけF・ウラレスの『花の種を撒いて』）、ロシアの当時の事情がこれを不可能にした。ISABの設立者たちは、全世界のアナキスト・エスペランティストたちに世界的機構の設立の可能性をさぐるよう呼びかけた。この考えは、フランスのアナキスト、J・ミンジはじめロシアの活動家、S・ハイドフスキーやフテルファスによっては好意的に受け入れられた。これら同志たちが〝TLES〟（全世界エスペランティスト無国家人連盟）の中核となり、数ヶ月後には、十五ヶ国に会員をもった。しかし、この連盟が組織されたとき、ロシアの状況が悪化し、そこのアナキストたちは、ボルシェヴィキの弾圧によって沈黙させられてしまった。レヴァンドフスキーはシベリアに送られ、ハイドフスキーとフテルファスはテロリズムの嵐の中に消えてしまった。ただジルベルファブだけが、コミュニストをおだててのがれることに成功した。彼はレーニンが死んだ時、称賛の言葉を著した。

ロシアの同志が消えてしまったため、J・ミンジは、その献身的な伴侶ジュリエッタとともにTLESの運営を引き受けた。新しい参加者の中には、ベルギーのヘム・デイ、中国の劉師培、日本の山鹿泰治がいた。山鹿は、老子の『道徳経』を古代中国語からエスペラントに訳した。このエスペラント訳が、後にスペイン語訳され、一九六三年、『土地と自由』誌に載ったものである。

一九二五年以来、TLESはベルリンで月刊誌『自由労働者』Libera Laboristo を発行していたが、一九三三年にはAITと共働して、国際的アナルコ・サンジカリズム運動に有用な情報誌を出版した。

アナキストの出版物として特筆すべきものは、ブルガリアの同志によって創刊され、後にストックホルムのアナキスト・エスペラント・グループによって継続された『労働者』、一九三一年に編集者の入獄のため廃刊になった日本の『アナキスト』、SATのアナキスト・フラクションの機関誌『羅針盤』がある。

一九三六年から三九年まで、バルセロナでは、〝ILES〟（イベリア・エスペランティスト無国家人連盟）の編集によるCNT・FAIの情報誌が発行され、週三回、CNT・FAIは、エスペラントでラジオ放送を行った。

ドイツでのナチズム、ロシアその他の国々でのアナキストに対する迫害、スペインでの戦争の悲劇的な終結、そして第二次世界大戦のために、アナキストのエスペラント運動は沈滞し、TLESは消滅した。その多くの会員は、迫害と戦争の嵐の犠牲となった。しかし、一九四五年国際関係が再建されるとともに、アナキストも交流を回復した。一九四六年、パリで『無国家人』Senstatano が発行されたが、これは初め「青年アナキスト・インタール」の暫定委員会のエスペラント語機関誌であったが、のちにアナキストのエスペラント運動の絆となり、TLESによって企図された仕事を継続した。同じ時期に、パリのエスペランティストのリベルテール・グループは国際アナキスト交流委員会（CRIA）と精力的に共働し、この委員会が発行した情報誌を翻訳したり、世界各地の同志との手紙によるエスペラント語での交流の世話をした。

一九六九年、全世界無民族性協会（SAT）のリベルテール・フラクションは、再び活発な活動を始め、その会報『リベルテールの絆』Liberecana Ligilo を発行したが、その目的は、エスペラントの無民族主義という実り豊かな活動領域にアナキズムの理念を普及することである。なぜなら、そこでこそ無民族的言語エスペラントの真の存在目的が発揮されるからである。（Liberecana Esperanto—Rondo の共訳）

〔解説〕アナキストによるエスペラント運動を概観したこの小文は、ベネズエラから発行されているスペイン語のアナキズム誌 "Ruta"（否定の意）の十四号（エスペラント特集号）に載った論文の最後の章の訳である。著者ヴィヴァンコスは、スペイン文学の博士でもある、カナダのエスペランティスト・アナキストである。なおこの日本語訳は、エスペラント語による唯一の国際アナキズム誌『自由の絆』一九七五年六月号からの重訳である。（この雑誌の購読については本誌十月号を参照）

この小文には出てこなかったが、アナキズムに関係あるものとして、SAT（全世界無民族性協会）の歴史、その創立者で、アナキストでもあったE・ランティの生涯と思想（＝無民族主義）などもたいへん興味深い。いづれ紹介したいと思う。

まだまだ一般のエスペラント語に対する関心は薄い。

他民族人には結局使いこなすことのできない（主人になれない）英語で満足しているのだろうか。（江藤敏和）

想い出の人びと (1)

安谷寛一

平岩様について

私は平岩様には一共会ったきりだから、先方には記憶などないかと思うが果して如何？

大正十五年の夏だったと思う。児島東一郎君が中野の療養所で亡くなったとかで、それを落合火葬場に運んで来たが、二、三時間待たないと骨が貰えないとかって、川口K介の案内で、火葬場近くに住んでいた私の家に来られた。その時どんな話をしたか忘れたが、カタミにとかって死んだ人のジュバンの袖をおいて行かれた。黒絹の袖だった。私はそれを調法にしてづい分何年もジュバンにつけていた。そんな話平岩様に伝えて下さい。そして一つ川口K介何処でどんな風に死んだのか御存じだったら聞かせて下さいって伝えて下さい。

近藤憲二君のこと

近藤君は丹波篠山辺の生れとあるから私の但馬とは隣り同志だが初めて会ったのは最初の労働運動社、大正九年四月、東京市電争議最中だった。田舎者の私が三田四国町に用たしに行くというのをタクシーで送ってくれた。大杉の家政上の番頭役だったので、彼の死後は出版屋アルスと私の関係にもいろいろ関係があって何年も面倒見てもらった。グウタラでだらめな私と異って真面目な善い人であったが面白くもおかしくもない人だった。だから思い出らしい思い出はのこっていない。ただ一つ場所がよく分らないが、真柄様と一緒になってからの彼の家にルクリュの「地人論」を取りに行ったが大きな本六巻もので一、二、三巻三冊だけ持って帰った。真柄様の義母、為子未亡人も同居中のようだった。大杉と私、仲間をつくってファブルの全著述と「他人論」六巻必ず片づける（翻訳出版）約束がありアルスにつながり、近藤君にもつながっていたためだった。

私は昭和になってファブルは片づけたが、この「地人論」には至らなかった。

その時の家、昔のままなら行くことは行けるが、もうすっかり変って分らないか？

死ぬまでに一度真柄様に会いたい。が、いつ立てるか？

野火

☆平井貞二さんより

「リベルテール」の会の諸兄。毎度ながらの御活躍病床の中に有って拝読さして貰って居り、毎号の企図と経営上の難しさを思う時、唯頭が下るばかりです。10月号の谷寛城の一文は、当時、市ヶ谷のムショに和田久、朴烈、金重漢などと同房していただけに源ニイの事、まったくそのままで、和田久のその後の苦しみよう、僕に語った言葉など思い出します。相沢君の日労会議書記長時代、白井新平君の競馬新聞に紙の横流しをしていた件など、語るに落ちた真相、逸見吉三が大矢省三のカバン持ちをしていたので、日労に相沢、佐竹を入会させ有給役員としたもの。…

☆清水修一君より

振替いただきました。ありがとうございます。今年は未だ雪が降りませんが、段々と寒くなってきて、そろそろシモヤケの季節です。それでいただいたお金で沓でも買おうと思います。春木さんという方はリベルテールで会った事のある方かも知れませんが、どうも記憶にありませんので、三浦さんからよろしくお礼をお願いします。ぼくの方は元気でやってますので御安心下さい。勉強の方もいろいろやってます。出てからいろいろ教えていただきたい事等もありますが、その時はよろしく。満期迄あと二年半です（五三年七月一三日）リベルテールの皆さんにもよろしくお伝え下さい。それではお元気で。

☆恵与された誌紙より

「サルートン」No.186

非暴力直接行動は無力か…は＜自己にとって終局的に、暴力が反革命たらざるをえない、ということにおいて、暴力を執りえない立場と主張がある＞としてしかもなお＜革命の創出過程においていかにして暴力を避け、暴力を用いないで、なお闘うこと、闘いに勝って権力を打倒することができるか！＞を自己の問題設定としている。文脈からは目標として力を権力化せしめない方法の探究のように思うが現在的には出発点にいるのであって、この論旨の展開は＜力は力である＞のトートロジ（類語反復）をどう断つか予断できない。

「関西地方準備会ニュース」第9号、総括から展望へ…

＜連盟準備会とは、社会との直接的な関係をある共同的な意志として表現する集団（一般運動体）ではなく、ある一つの思想として表現して行かんとする組織＝連盟の建設を目指す集団である。さらにいえば、自己の生活と直接に関係しない、政治的な関係なのである＞と規定し

て、個別的な実践から連盟を結成せんとすることやサロン、更に「実践」の中からの「思想」を「純化」させていくことなどを不十分としている。本文を熟読すると?!政治結社への指向と共同体（国家と人間の生活の矛盾を解き新しい共同体の生成を自覚的に行おうとしている）指向の混在から論旨が今ひとつはっきりしない。他に竜大闘争、救援ノートなどが興味深く有益。

月刊協同体第133号では続きもののアメリカ・コミューン廻りXⅢがよい。個人主義・合理主義をかたくるしく、＜常に大人として、しっかりしていなければならない＞という社会に反対してメロメロでいいではないか！と言う。が高層ビルに常会や社（やしろ）を設置するわが社会でそのかねあいがどこに落着くかまだ未定。

「連帯」連帯新聞社1甲府市和田町2716〜11、10月15日号に向井孝さんの＜金子文子忌について＞をサルートンつうしん一八四号から転載している。要旨は金子文子と＜狼たち＞との間に五〇年半世紀のへだたりがありながら両者をとりまく状況は変っていないとする。また市民の死の＜遠さ＞＜近さ＞についてヴェトナム戦争では解放戦線側のそれはやむを得ないとしながら＜狼＞の爆弾を指弾する矛盾をあげている。

海外だより

☆フランスのリリン・ゲラール君から便りがあった。同君は25才、ル・モンドリベルテール（会員500名）に属しているという。過日ヤマモト・アキさんからリベルテール9月号でサルトルのアナーキスト宣言を訳載したところ、手紙があって、サルトルはかっこ付きのアナーキストではない、アナーキストらしいとすればその所にフットライトを浴びせるべきだと指摘された。アナーキストはインターナショナルであって、未だ一国のアナーキズムというのは聞かない。オランダのミッシェルトビン等はフランスのアナーキスト、日本のアナーキストなど存在するのではなく地球的な規模でいえば＜アナーキスト＞があるだけだと言う。つまりコスモポリタンの意味なのだろう。それにしてもサルトルを天才的などと言った手前、まず彼の同国人であり、彼からカッコ付きでアナーキストといわれているフランスの同志はどう見ているか聞いてみた。その答えの一つが次のものだ。

「ぼくは18才の時、多くの講義を聞いたけど、ジャンポールサルトルに興味を持っていない。だから貴方の問に答える資格はないと思う。……けれど知ってることを話します。先づ彼は決してアナーキストではなかった。共産

党と働いていたのです。ロシアがハンガリーに侵入した時、その時彼は共産党と手を切り、ある意味で＜圏外＞の人になった。指摘したいのはアルジェリア戦争でカミュと対立したことです。カミュはル・モンドリベルテールに僅かですが投稿しています。一九六八年にサルトルは毛主義者と闘い、当時は影響があった。それから多くの毛主義者の新聞を集めて＜出版の編集長＞になったのです。政府も＜ノーベル賞＞の新聞を禁止することはできなかった。今、彼がどうしているか知りません。けれどまだ＜人民の大義＞という毛主義者の新聞の編集をしていても驚くにあたらないでしょう。ぼくはぼく達の機関誌で彼がある意味でいつもアナーキストだったとインタビュで答えたと聞きびっくりしました。彼の用語では今日多用されるような＜個人主義者、余白の人間＞という意味で、レーニンがそうであったと同じ仕方でアナーキストなのでしょう。つまり政府の廃止の必要性に同意するとしても過渡期の労働政府の樹立にも同意するのです。この状況は〃三月廿二日運動〃のダニエル・コン・バンディのメンバーの大部分が自発的毛主義者の〃左翼プロレタリア〃になって北京と関係を持っているフランス共産党（マルキスト、レーニン主義者）と衝突するようになり厳しさを増しています。ル・モンドリベルテールの11月号を同封しますからサルトルに付てはアン・レグネルの論文を見て下さい。……」

レグネルは＜否＞、ジャンポールサルトル、貴方は未だアナーキストではない＞の中でアナーキストの＜我は他者の我に対し能動的な兄弟としての我であって「嘔吐」のロカタンは孤独な禁欲者に過ぎない＞とする。また＜革命は自由な創造者の手によって成されるのであって、全体主義の弟子、論理学やマルクシズム、毛主義の弟子によって成るものではない＞またマルキストの弁証法とブルードンの弁証は違うのであって、サルトルが全体主義の弁証法と訣別するなら、その差異を研究せよ。ブルードンは言っている＜ヘーゲルは絶対主義の政府を認めたホッブスと同じく、国家の全能性、個人とグループを従属させるのである＞。要するにマルキストの弁証法は絶えざる否定の弁証法であり、アナーキストの弁証法は創造の弁証法である。ブルードンの創造的ジンテーゼは＜決して第3の名辞ではなく、2個の相反の相互活動だ＞と肯定している。レグネル説は弁証法につきブルードンを思いださせて呉れるだけでも有益だ。

なお先のゲラール君はフランスアナーキスト連合の一員としてその原則を報じて呉れた。

「われわれは500名のメンバーだが（アルシノフ）の綱

領主義に反対する。そして原則として、1.アナーキズムのすべての傾向性の共存。2.すべてのグループの理論と活動における自立性、3.個人の責任としては、もしあるグループが小冊誌を出版するとすれば、その責任は書き手にあるのであって、組織には ないとする…ことです」他に〈アナーキスト革命組織〉(綱領主義)、〈フロン・リベルテール〉(約一五〇名のメンバー)、〈リバータリアンコミンニズム〉等の組織を説明、「今日、ダニエル・ゲランのように〝リバータリアンマルキスト〟を名乗る人が多くなって、アナーキズムとマルクシズムにつき集約的な研究を始めました」と結んでいる。

☆フリダム紙12／6号によると5日ワーウィック大学で約70名の同志が会議を開いた。「全国的連合への意向が確認され、その形成へ向けての更なる歩みをつづける」そうだ。構造形成はクリスマス後に持越され、その後復活祭(2月頃か?)にも継続する。討議は現在でている アナーキスト連合紙をコルビィアナーキストグループが続けるか、ワイルドキャットのメンバーを中心とするロンドングループに頼むかどうか、意見では現状の穏やかな紙面をもっと野心的なものにせよ…であった。決定したのは海外からの情報はワーウィックグループが受付け連合紙で紹介すること。論者は言う「この会議に外国の同志が出席していたら、英国のアナーキストの形式ぶりに疑問を持ったろう」と皮肉っている。ホットな議題はフランスのアナーキスト連合のように〈全国組織を樹立して共通の理念を効率よく流布するに当り〉書記局を設置するか…につき会場からは、一種の悲哀の〝うめき〟と〝肩をすくめる〟身ぶりがみえたが、書記局は連合の通信事務を扱う名称ということに落着いた。個人主義者は会議中〝くだらん〟〝こんなものに俺達はわづらわされない〟と言っていた。が大部分は連合(又は革命者の全国協会?)を認め「階級、集権、形式的会員制、集約化した責任のとり方、責任の代表制等は認めがたい」と否するのではなく、連合が拡大すれば何らかの代議制が必要となろう。その際は自由な組織を壊さないよう管理する要もあるが現状ではその必要はないとする意見もあった。土曜日の午前中の会議ではアナーキスト労働者協会に対する苦情として、協会のアナーキスト連合に対する傾向、アナーキストが過度な個人主義に悩まされていること、その厳しい集権組織等が批判された。フリダムコレクティブではブラッククロスとは別に世界的規模で救援体制確立を訴えたと言う。